

論 説

地域水産物のカツオを活用した「枕崎カツオマイスター検定」の 評価と今後の方途

－過去10回の実施に関する受検者アンケート調査の分析をもとに－

若 林 良 和* (産業イノベーション学科)

佐 藤 弘 大 (枕崎市役所)

濱 村 百合子 (枕崎市観光協会)

* 責任著者

Evaluation and Future Directions of the “Makurazaki Bonito Master Certification” Utilizing the Skipjack Tuna of Local Fishery Products :
Based on the analysis of candidate surveys from the past 10 implementations

Yoshikazu WAKABAYASHI * (Industrial Innovation)

Kodai SATO (Makurazaki City)

Yuriko HAMAMURA (Makurazaki City)

* Corresponding author

キーワード：地域水産物、カツオ、評価、受検者アンケート

Keywords: Local Fishery Products, Skipjack Tuna, Evaluation, Candidate surveys

【原稿受付：2026年1月19日 受理・採録決定：2026年1月30日】

要旨

枕崎カツオマイスター検定は地域水産物であるカツオを活用した持続可能な水産振興と漁村地域活性化を意図して設けられ、過去10回にわたって実施されてきた。その評価と今後の方途について、受検者アンケート結果の分析をもとに、第11回以降に向けたリニューアル企画・実施に求められる基本的なポリシーを提案した。具体的な検定改善策（参加しやすい環境づくりの構築、参加したくなる内容への更新）の前提となる5つのポリシーは、①全世代対応型の検定、②フィールド体験型の検定、③地域密着型の検定、④地域協働型の検定、⑤コミュニティ共進型の検定であることを指摘した。

1. はじめに

「専門的に幅広く学べ、大変、勉強になりました。ご当地検定の域を完全に超えています」

「市内のどこに行っても笑顔で楽しそうに教えて下さり、ホスピタリティを随所に感じられ、枕崎の皆さんが協力し合っておられて、(枕崎は)素敵なところだと思いました」

「合格したら、マイスターを入れた名刺をつくって、自分の仕事に活かしていきたいです」

「家業が鰹節・削り節業のために、たくさんの知識を深く学べて、これまでの振り返りができた」

「ぜひ、全国の飲食店などに勧められるくらいの、すばらしい検定になってほしい」

これらの意見や感想は、筆者(若林)が検定委員長になり、鹿児島県枕崎市で実施している「枕崎カツオマイスター検定」(以下、本検定と略す)に対する受検者アンケートの自由記述欄に記されたものである。

本検定は、2010年10月の第1回を皮切りに、途中、コロナ禍のために中断があったものの、過去13年間で10回にわたって実施している。その検定の終了時、無記名式の受検生アンケート調査を行っており、そのアンケートの最後に、冒頭のようなポジティブな意見や感想が数多くあった。過去10回にわたる取組のなかで、枕崎市役所、枕崎市漁業協同組合、枕崎水産加工業協同組合の関係者、さらに、筆者(若林)ら授業・座学の講師陣(大学研究者やNPO関係者、市内のカツオ・鰹節の関係者ら)は毎回、受検生アンケートの結果に安堵を覚えつつ、新たに気を引き締めて本検定に取り組んできた。そして、本検定は2023年11月には第10回を数えたのである。

本稿では、地域水産物のカツオを活用した持続可能な水産振興と漁村地域活性化を意図して設けられた本検定に関して、過去10回にわたる受検者アンケート結果の分析をもとに、その評価と今後の方途を検討するのがねらいである。¹⁾ 本稿は、受検者アンケート結果から過去10回の取組や成果を踏まえて具体的な改善策の方策を提示した上で、本検定の第11回以降に向けたリニューアル企画・実施に求められる基本的なポリシーを提案することである。²⁾

2. 枕崎カツオマイスター検定の概要

(1) 背景と目的

本検定は、基本的に、鹿児島県枕崎市で水揚げされるカツオ、加工製造される鰹節に関する知識や技術な

ど知見を問う検定である。枕崎市は、人口18,898人(2025年1月の住民基本台帳による。外国人を含む)で、九州南部、薩摩半島の南西端に位置する。³⁾

日本の太平洋側、黒潮沿岸域にはカツオ漁業や鰹節製造業の盛んな(盛んだった)地域が多くあるなかで、筆者(若林)は本検定を枕崎市で実施することが適確だと判断した。その背景や理由は種々あるが、その決め手となったのが次の2点である。第1に、枕崎市は、カツオ漁業と鰹節製造業が地域に一体的に存立しており、まさに、日本におけるカツオ産業都市の典型と位置付けられたことによる。より詳細な意味付けをするならば、枕崎市漁業協同組合が自営の大型カツオ漁船を有し、「枕崎ぶえん鰹」というカツオの刺身商材をブランド化する一方、枕崎水産加工業協同組合は「本場の本物」の認証を取得して、本枯れ節をはじめ鰹節生産量日本一を誇っている。第2に、カツオ産業(カツオ漁業と鰹節製造業)を担うのに不可欠な2つの組織である枕崎市漁業協同組合と枕崎水産加工業協同組合は、極めて良好な関係を堅持し、これまでに多様な連携をもとにカツオ産業振興に関わる諸事業が円滑かつ、効果的に展開されてきたことによる。そして、持続可能性を前提とする本検定の趣旨にのっとり、枕崎市では、産業界に加えて行政や民間組織などが核となり、大学や学会などアカデミアとの伴走で、地域ぐるみの産官学民による連携が展開できるものと、筆者(若林)は想定した。

本検定の目的は、枕崎市民はもちろん、鹿児島県内



写真1 過去10回(第1~10回)の枕崎カツオマイスター検定チラシ表面

表1 カツオマイスター検定の養成講習会・検定試験のスケジュール：第1回検定（2011年10月）

養成講習会・検定試験のスケジュール			
●会場：枕崎水産加工業協同組合・枕崎かつお公社			
10/8 カツオを体感する日 視察と実習の日	13:00～13:10	主催者の開会挨拶（枕崎カツオマイスター検定推進協議会会長：神園征・枕崎市長）	
	13:20～14:20	1時間 カツオの視察：市内のカツオ資源を訪ねる ① 枕崎港での水揚げ見学 ② かつお節工場（的場水産）での製造についての見学	
	14:30～15:20	2時間 カツオの実習1：カツオの三枚おろし（解体の解説・見学）	
	15:30～16:20	3時間 カツオの実習2：かつお節の削り体験	
	16:30～16:50	4時間 カツオ学（カツオ検定）へのいざない：テキスト・序章（若林 良和）	
	16:50～17:30	5時間 「魚籠」でカツオを探る ①：テキスト・第4,5章（不破 茂）	
	17:30～17:40	第2日講習会の確注意	
	18:00～	「カツオについて語り合う夕べ」：カツオ料理のフルコースを提供。 *お魚センター（会費 3,000円；希望者のみ、事前申し込み）	
	10/9 検定試験を受ける日 「医学でカツオの	9:00～9:20	6時間 「魚籠」でカツオを探る ②：テキスト・第9章（若林 良和）
		9:20～10:00	7時間 「魚色」でカツオを探る ①：テキスト・第1,2章（町領 芳朗）
10:10～10:30		8時間 「魚色」でカツオを探る ②：テキスト・第3章（横山 佐一郎）	
10:30～11:10		9時間 「魚籠・魚食」でカツオを探る：テキスト・第6,7章（鳥居 享司）	
11:20～12:00		10時間 「魚籠」でカツオを探る：テキスト・第8,10章（東川 隆一郎）	
12:00～13:00		昼食（お魚センター：代金 650円；希望者のみ、事前申し込み）	
13:00～13:30		検定試験の受験にあたっての確注意（枕崎カツオマイスター検定委員会委員長：若林 良和）	
14:00～15:30		枕崎カツオマイスター検定試験	
15:30～15:50		閉会挨拶（枕崎カツオマイスター検定推進協議会会長：西村直・枕崎水産加工業協同組合代表理事組合長）	
講師		若林 良和 愛媛大学水産学センター副センター長・教授、日本カツオ学会会長	
	不破 茂 鹿児島大学水産学部教授、日本カツオ学会運営委員		
試験方法	町領 芳朗 鹿児島県立鹿児島水産高校教師		
	横山 佐一郎 鹿児島大学水産学部助教		
	鳥居 享司 鹿児島大学水産学部准教授		
	東川 隆一郎 NPO法人まちづくり地域フォーラム・かこしま探検の会代表		
	試験時間 90分、出題数は70問です。		
試験範囲は、本検定公式テキスト、および養成講習会の視察と実習の内容を含みます。			
出題方法は4択一式とします。			
試験料	①受験料：¥3,000 *これには、養成講習会、試験検定の経費一式を含みます。		
	②テキスト代：¥2,100 *カツオ学入門（8月中旬発行）（全170ページ）は全国の書店にて販売予定。		
試験申し込み	①【試験申し込み期間】平成23年9月1日（月）～9月30日（金）。		
	②【定員】最大120名（先着順）。		
	③【合格発表】平成23年10月31日（月）（枕崎市のHPで合格者の受験番号を掲載します。）		
	④【合格発表後】10月31日以降に受験者へ結果を送付します。		
①所定の検定申込書に必要事項を記入の上、受験票には必ず、本人写真（運転免許写真と同規格 30mm×24mm）を添付し、検定料とともに郵送で申し込んでください。			
②お申し込みをした本人のみが受験できます。（代理受験は一切認めません。）			
③一度納入された受験料の返還はできません。			
④台風、地震、洪水、津波等が発生した場合は、試験を延期することがあります。			
枕崎水産加工業協同組合	〒880-0001 枕崎駅前2-22-1 電話 0993-73-1111（内線421） http://www.city.makurazaki.kagoshima.jp		
	〒880-0001 枕崎駅前2-22-1 電話 0993-73-1111（内線421） http://www.city.makurazaki.kagoshima.jp		



写真2 公式テキスト『カツオ学入門』：2011年8月

をはじめ広く全国各地の一般の方々、さらに市内外のカツオ産業関係者に対して、枕崎のカツオ・鯨節について、正しい知識を見につけ、自らの食生活に活かしつつ、カツオの価値を問い直し、カツオ・鯨節の良さや魅力などを広く伝導してもらうことである。つまり、枕崎カツオマイスター（以下、マイスターと略す）はカツオ・鯨節に関する魅力を発信する人材であり、本検定がその人材養成の大きな一翼に位置付けられる。極言すると、本検定は「カツオ・鯨節の伝道師」養成の第1ステップといえるだろう。

(2) 内容と方法

過去10回における本検定の実施において、スケジュールや進行は基本的なパターンとして、当初から確立されており、大幅な変更はない。そのことは、第1回検定から第10回検定までのチラシ、養成講習会と検定試験のスケジュールからも裏付けられる。具体的な基本的なパターンは以下のとおりである。（写真1、表1参照）

本検定では、前述の目的を達成するために、最終的に検定試験を実施しており、一定の基準をクリアした受験者は合格者、つまり、枕崎カツオマイスターとし

て認定されている。検定試験の受験には、枕崎市内で2日間にわたり実施する養成講習会の受講が原則である。この養成講習会と検定試験はセットで、毎年10～11月の土・日曜日に実施されている。養成講習会の大まかなスケジュールと内容は、第1日に、午前中に視察・実習、午後に授業・座学、そして、夕方より「かつおについて語り合う夕べ」が、それぞれある。第2日に、午前中から午後にかけて授業・座学があり、最後に検定試験は実施される。受験料は3,000円（税込価格。これには、養成講習会の費用、試験検定の経費一式を含む）であり、公式テキスト『カツオ学入門』の価格が2,100円（税込価格）となっている。（写真2参照）

視察・実習は、「カツオを体感する」ために、枕崎市内にあるカツオに関する歴史遺産（たとえば、原耕像）を視察したり、カツオの水揚げを見学してカツオの三枚おろしなど捌き方を学んだり、鯨節工場を見学した後、鯨節を削って出汁をとり、茶節にして試飲したりするなど、観察と試行を伴う内容である。授業・座学は、「カツオの知識を深める」ために、本検定の公式テキスト『カツオ学入門』を用いて、カツオ・鯨節に関する基礎的、かつ、実学的な知識を提供する。⁴⁾ 「かつおについて語り合う夕べ」は、「カツオを体感する」もので、市内のカツオ・鯨節関係者、授業・座学担当の講師陣と交流しながら、枕崎のカツオ料理（ぶえん鯨の刺身やタタキ、ピンタ（頭部）などの伝統的、かつ、創作的なメニュー）のフルコースを堪能できる

会合である。また、これは鰹節の削り競争などの余興もあり、カツオ・鰹節の魅力を再認識する機会となっている。なお、この会合の会食はオプションで任意となっており、希望者のみの事前申込である。会費が実費徴収でリーズナブルになっている。検定試験は養成講習会の最後に、試験時間90分で行われる。出題範囲は公式テキスト、および、視察・実習の内容、出題数70問、4択の出題方式である。本検定が体験を重視していることから、検定試験は筆記試験のみであるものの、授業・座学の内容だけでなく、視察・実習の

内容が含まれていることが特徴になっている。合格基準が正解率70%（49問）以上で、それに達した受検者は合格者とし、2種類の認定証（賞状とカード）が授与され、枕崎カツオマイスターと呼称できる。（写真3～8参照）

なお、本検定は、実施主体の枕崎カツオマイスター検定推進協議会、さらに、産業界の大日本水産会、学界の日本カツオ学会の認証を受けており、単なる御当地検定ではなく、専門性の高い本格的な検定と位置付けられる。⁵⁾



写真3 原耕像の見学：第6回検定
(2016年11月、撮影：若林良和)



写真6 枕崎のカツオ料理フルコース：第6回検定
(2016年11月、撮影：若林良和)



写真4 カツオ三枚おろしの体験：第5回検定
(2015年11月、撮影：若林良和)



写真7 認定証の賞状（サンプル）：2011年10月



写真5 鰹節工場の見学：第9回検定
(2019年11月、撮影：若林良和)



写真8 認定証のカード（サンプル）：2011年10月

(3) 位置付け

本検定は、前述したように、授業・座学のほか、視察・実習を盛り込んだ体験型検定となっているが、その背景には、「ぎょしょく教育」のコンセプトやメソッドがある。それを準用していることから、本検定は「ぎょしょく教育」実践の機会と位置付けられる。⁶⁾これは、7つの「ぎょしょく」（魚に関する触・色・職・殖・植・飾・食）という多面的な視点から検討する「カツオ学」を基盤に、カツオ・鰹節に関する知見を総合的に理解し、かつ、立体的に体感し体験してもらうことを意味する。その結果、カツオ・鰹節の良さや魅力といった価値を見直し、その価値を広く普及啓発してもらいたいという意図が本検定にある。

そして、本検定は「ぎょしょく教育」の観点から地域の水産物であるカツオ・鰹節について学ぶために、「地域理解教育」という位置付けも可能である。カツオ産業都市である枕崎市の地域特性を明確に把握し、地域への愛着や誇りの醸成につなげることも想定した。さらに、本検定は、輸入水産物の増加に伴う食糧自給率の低下や国民の魚離れなど深刻な問題が多くあるなかで、カツオ・鰹節をもとにした水産振興、さらには、漁村地域活性化につなげられる可能性も秘めている。すなわち、本検定には、地域はもとより、日本全体の水産物の成長産業化を図っていく重要な手段、あるいは、その起爆剤の1つとなり得るという期待があるわけである。

3. 受検者アンケート調査分析と新たな企画・実施の提案

(1) 調査の実施要領

具体的な受検者アンケート調査の実施要領は次のとおりである。実施時期が検定試験の終了後で、その方法は自計式（当日の試験会場で、受検生にアンケート用紙を配付して記入してもらい退室時に回収する方法）をとっている。調査項目は以下のとおり、属性項目（3項目）と実態把握項目（10項目）の2種類である。なお、受検生アンケート回収率は、実施のタイミングが功を奏したために、100%（配付者数：650人、回答者数：650人）となった。

まず、属性項目は、①性、②年齢、③居住地の3項目であり、受検票をもとにした。

それから、実態把握項目は、以下の10項目（そのうち、1項目で3つの小項目、もう1項目で2つの小項目）である。

- ①検定情報の入手方法（この検定をどこで知りましたか。）
- ②受検の理由（この検定を受けることにした理由は、何ですか？〈自由記述回答〉）

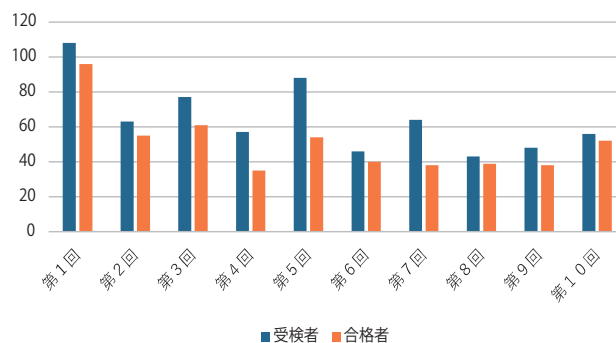
- ③養成講習会の評価（〈大変良かった・良かった・悪かった・大変悪かった〉該当するものに○印を付け、その理由をできるだけ記入してください。）
 1. 視察・実習（1～3時限目）
 2. かつおについて語り合うタペ
 3. 授業・座学（4～10時限目）
- ④検定試験の評価（〈大変良かった・良かった・悪かった・大変悪かった〉該当するものに○印を付け、その理由をできるだけ記入してください。）
 1. 試験時間
 2. 試験問題
- ⑤受検料の評価（〈高い・ちょうど良い・安い〉該当するものに○印をつけてください。）
- ⑥公式テキストの評価（〈大変良かった・良かった・ふつう・悪かった・大変悪かった〉該当するものに○印をつけ、良い点、悪い点を記入して下さい。）
- ⑦友人・知人への推奨意欲（この検定をあなたの友人・知人に勧めたいと思いますか？ 該当するものに○をつけて、その理由を記入して下さい。）
- ⑧今後の生活への活用方法（この検定を今後の生活にどのように活用したいと思いますか。〈自由記述回答〉）
- ⑨改善点や希望内容（この検定について、改善すべき点や希望する点がありましたら、詳しく記入して下さい。〈自由記述回答〉）
- ⑩推進すべきこと（この検定で、より一層、推し進めるべき点がありましたら、詳しく記入して下さい。〈自由記述回答〉）

(2) 受検者・合格者数・合格率の推移

過去10回、つまり、第1回（2011年10月）から第10回（2023年11月）までの受検者数（総数）は650人である。第1回が108人で始まり、その後は40人台から80人台の受検者数を推移している。（図1参照）

合格者は多い時（第1回）で96人、少ない時（第

図1 受検者数と合格者数（単位：人）



4回)で35人となり、その総計が508人に及んだ。その合格率(合格者/受検者)は平均78.2%で、最高時(第10回)で92.9%、最低時(第7回)で59.4%であった。

本稿では、単純集計結果の推移を中心に分析しておきたい。⁷⁾

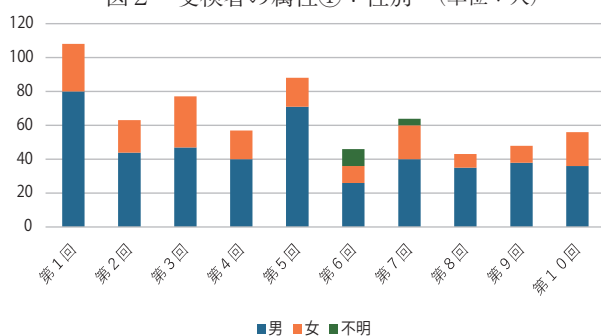
(3) 属性

1) 性別

性別をみると、男性457人、女性179人となり、全体の約7割を男性が占めている。それで、男性が8割以上を占めたのは第5回(80.7%)と第8回(81.4%)であった。

他方、女性の受検者が3割以上に及んだのは第2回(30.2%)、第3回(39.0%)、第7回(33.3%)、第10回(36.7%)となっていた。(図2参照)

図2 受検者の属性①：性別 (単位：人)

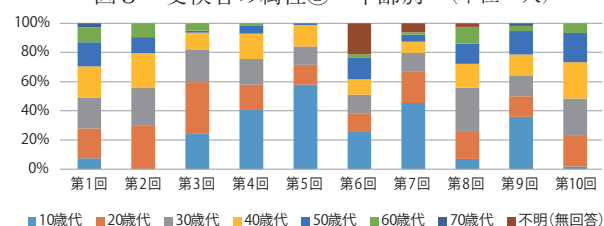


2) 年齢別

年齢(世代)別にみた場合、10歳代が166人(25.5%)と4分の1に及ぶが、これは鹿児島県立鹿児島水産高校の生徒が多く受検したことによる。そして、20歳代139人(21.4%)まで含めると、全体の約5割弱に及ぶ。それらに30歳代127人(19.5%)を加えると、受検者全体の6割以上となり、30代までの若い受検生が多い。(図3参照)

そうした状況に対して、60歳以上の高齢の受検者は106人と、16%程度にとどまっている。

図3 受検者の属性②：年齢別 (単位：人)



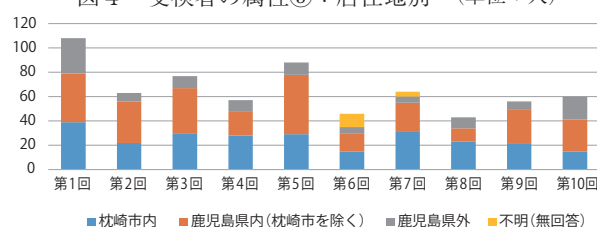
3) 居住地別

居住地別には、枕崎市内は253人(38.9%)と4

割を占めており、枕崎市を除く鹿児島県内284人(43.7%)が続く。鹿児島県内では、鹿児島や南九州市、南さつま市、指宿市など近隣・周辺地域の受検者である。いずれにせよ、8割以上は鹿児島県の受検者であり、いわゆる、ご当地性、さらに、地域密着性が強い。(図4参照)

他方、鹿児島県外の受検者は、110人(16.9%)でとどまるものの、北は北海道から、南が沖縄県までに広がる。それで、県外受検者の多くは、東京都や福岡県、大阪府の大都市圏、静岡県や千葉県、高知県、愛媛県などの水産業の盛んな県に居住している。

図4 受検者の属性③：居住地別 (単位：人)



4) 属性からみた基本的な対策と企画・実施上の視点

前述した受検者の属性分析から、今後のリニューアル検定の再構築に向けた基本的な対策と企画・実施上の視点としては、次の8点が指摘できる。

まず、本検定のリニューアル企画・実施における基本的な対策は、以下の4点が指摘である。

第1に、受検者数は、第1回の最高数値108人に対して漸増漸減を推移し、第1回を超えられない状況にある。今回のリニューアル企画を契機に、抜本的な対策を講じて周到なPR広報活動を進めることが大前提となるだろう。

第2に、性別に注目すると、受検者に占める女性の割合が3割程度と低いことから、少なくとも、10~20%増を念頭に、女性をターゲットとする対策を練ることが求められよう。

第3に、年齢別に着目すれば、人生100年時代でリスニングやリカレント教育が求められる時代であることから、40歳代以降への対応、さらには、高齢者の対応にも配慮していく必要があるだろう。

第4に、居住地別では、本検定の目的や趣旨からすれば、「市内3割強、県内3割強、県外3割弱」程度のバランスが考慮されるべきだ。地域的には、日本の北海道から沖縄県まで受検者があるものの、県外の受検者を確保する手立てを検討する必要性は十分にある。さらに、海外への展開として、留学生や外国人技能実習生への対策も考えていくべきだろう。

以上のことから、「女性・中高齢者・県外海外者」をターゲットの中心にした受検者確保の対策を練ることが、受検者の増大という本来的な課題の解決につながる近道かもしれない。

次に、本検定の企画・実施上の視点としては、次の4点が指摘できる。

第1に、若者の受検者確保の観点からすれば、将来の進路や方向性を決める時期である10代のうちに、本検定を受検することは大変、貴重な経験である。現段階で大学生以下の検定料は半額となっているが、さらなる受検者の拡大のために、受検料やテキスト代の学割制度を充実させることも必要といえよう。

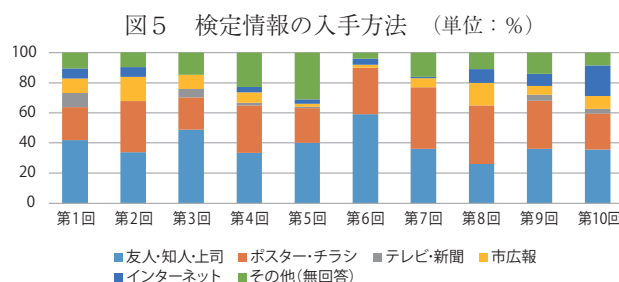
第2に、受検理由から、仕事に活用するという回答が多かった。枕崎市内外のカツオ産業をはじめ各種の水産業関係企業・団体に勤務する人たちに対して、本検定をPRすることは効率的な受検者増加につながるのではないと思われる。また、枕崎市にIターンやUターンしてきた人たちにも、枕崎市のカツオ・鰹節を通して地域のことを理解してもらう機会として、さらに、就職先として、カツオ産業など地域水産業を選んでもらうきっかけとして有効になり得る可能性があるだろう。

第3に、枕崎市を含む鹿児島県内からの受検者が多いことから、自分の生まれ育った地域水産物について理解を深めることは重要である。今後も、県内での周知広報は力を入れていくべきであろう。

第4に、県外からの受検者が減少していることから、抜本的な対策が必要である。本検定がカツオ・鰹節の魅力を伝える役割とともに、枕崎という地域自体をPRする役割も担っていることから、県外の受検者増大は重要である。そのためには、参加しやすい環境づくりが不可欠となる。県外からの受検をしやすくするために、鹿児島空港や鹿児島中央駅から枕崎までの送迎バスを出したりすることも肝要であろう。

(4) 検定情報の入手方法

本検定情報の入手方法（本検定の知った手段）としては、ほぼ毎回、「友人・知人・上司」からの情報提供がトップを占めている。つまり、本検定は、口コミの力が大きいと想定される。したがって、本検定の良さを誰かに伝えたくするようなポジティブな評価を得られる工夫が求められよう。口コミを重視するならば、もちろん、水産関係企業・団体や学校などの教育機関への積極的なPRは必須である。続いて、「ポスター・チラシ」が上位にある。これは旧来のツールであるが、一時期（第7回、第8回）、トップになるほどの



効果が一定あったことから、看過できない。そのほかに枕崎市の広報も一定の成果があり、検定協議会事務局による地道な情報活動は重要であるといえる。（図5参照）

ご当地検定ブームの最中に開始した本検定は、市内の受検希望ニーズを一定、充足した状況にあるとも想定でき、従来の周知活動が限界にきている可能性もある。それで、HPや広報誌だけでは制約があることから、抜本的な受検者の増加対策は必要であろう。そのためには、本検定の情報を簡潔に伝えて「参加したい、提供したい」と思えるようなインパクトのあるメッセージを、ポスター・チラシの制作、テレビ・新聞、SNSなどインターネットへの発信など、多面的に推進していくべきである。また、他の地域との連携強化を進めて、効果的な広報が求められよう。

(5) 受検の理由

本検定受検の理由は、自由記述であるために毎回の類似回答をまとめ直した（アフターコード化した）結果から、総体的には以下の3点があげられる。

第1に、「仕事に関わりが深いから」、「仕事に役立たいから」という回答が毎回、最も多い。仕事との関係性を理由とする回答のほとんどが、鰹節や削り節関連の企業・団体、漁協、その他の水産業関連企業・団体などの関係者、公務員、教員、食育実践者などである。職業的な理由から、本検定はリスニングやリカレント教育に資する局面を持つことも認識し対応していくべきであろう。

第2に、「カツオ・鰹節の知識を深めたいから」、「カツオ・鰹節に興味や関心があるから」、「カツオ・鰹節が好きだから」、「実習や施設見学などがあり、普段知れないことが見られるから」、「カツオ・鰹節は優れた食材であることをアピールしたいから」、「カツオの権威、専門家の方々のお話を集中的に聞けるから」、「誘われた時に、珍しく面白そうな検定だと思ったから」などが続いている。こうした回答は受検者の属性に関係なくみられ、幅広い受検の動機になっていることがうかがえる。したがって、本検定には、カツオ・鰹節に対する興味や関心を強く惹起させたり、愛着をより

高めたりする対応が不可欠である。本検定でカツオ・鰹節の知見や技術をさらに深化させることは、カツオ・鰹節の新たな価値創造への基盤となりうるだろう。

第3に、「枕崎に住んでいて理解を深めたいから」、「枕崎が好きで、もっと地域を知りたいから」、「枕崎の良さをもっと全国に対してPRしたいから」、「この検定をもとに地域を盛り上げたいから」、「ぎょしょく教育など食育を推進したいから」、「カツオが枕崎の観光資源となるから」といった回答も多くみられる。枕崎という地域に対する興味や関心、さらに理解を深めることで、地域の様々な事柄を総合的に理解する「地域理解教育」、さらには、地元の魚を通して地域への理解を推進する「ぎょしょく教育」にもつながるだろう。そのほか、「枕崎のまちづくり取組を知りたいから」、「参考にして、地域振興を進めたいから」と回答が枕崎市外の公務員など行政関係者から複数あった。本検定は地域活性化の術を考える素材となるような地域的な役割も期待されていることがうかがえる。

上述したような受検の理由は、当初、本検定の目的に通底するとともに、その趣旨とも合致することが明らかである。

「メンタルヘルスによる周産期死亡率を減少させるために、鰹節の出汁、茶節などを広める場づくりをしたいから」、「カフェ運営で朝食用に老若男女が集える場をつくる予定だから」、「この資格を取得して、進学や就職に少しでも役立てたいから」、「そば屋と本枯節の相乗効果を深く知りたいから」、「フランス旅行に行きたいから」、「会社の飲み会などで話のネタになるから」など、本検定に対する多様なニーズや数多くの期待が裏付けられた。なお、「上司に言われたから」、「学校で受けることが決まっていたから」といった受動的な受検も一定、あることを看取しておく必要もあるだろう。

(6) 実施内容の評価

本検定の実施内容に関する評価は、養成講習会、検定試験、受検料、公式テキストの4点から分析する。

1) 養成講習会

ここでは、視察・実習（養成講習会の1～3時限目）、「かつおについて語り合う夕べ」（オプションで任意参加）、授業・座学（養成講習会の4～10時限目）に関わる満足度をもとに、養成講習会の評価を整理し、今後の方向性を検討する。

①視察・実習

第1回を除いて、「良い」「大変良い」と肯定的な回答が8割を超えており、その満足度は非常に高くなっている。その理由は、自由記述の回答からみると、「カツオの生切り（さつま型の切り方）体験」

や「鰹節の削り体験」、「出汁取りの実習」、「カツオ一本釣り疑似体験」、「今まで知らなかった、化成工場などの関連施設・場所への視察」、「カツオが無駄なく利用されていることへの理解」などの普段できないような、非日常的で多様な体験ができたことによる。受検者が気軽に楽しみながら体験を享受して学び、カツオ・鰹節に関わる産業文化のリアリティを正しく把握することは極めて重要である。そして、視察・実習はカツオ・鰹節、枕崎という地域に関して親近感を感じるような貴重な体験ができたことと好評であった。したがって、見聞して触れ、嗅いで味わうという五感をフル活用するという本検定の手法は、高く評価され、本検定の目標を十分に達成し

図6 視察・実習の満足度（単位：%）

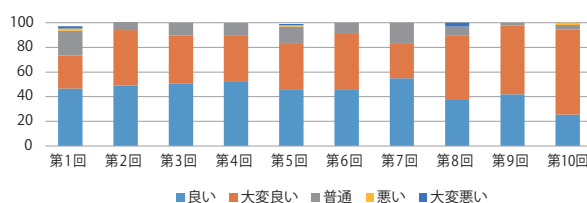


写真9 カツオ生切りの体験：第8回検定
(2018年11月、撮影：若林良和)



写真10 鰹節出汁とりの体験：第6回検定
(2016年11月、撮影：若林良和)

たことを裏付けている。(図6、写真9～10参照)

他方、否定的な回答としては、「時間が短い」、「説明が聞き取りにくい」、「もっと現場の声(漁師さんや節職人さんの生の声)を聞きたい」、「ポイントを押さえた説明がほしい」ことが毎回、あげられている。これは鰹節工場や化工場での視察でみられる傾向にあり、改善の余地があるようだ。その具体策として、事前の説明後に、現場でその実情を観察して確認するなどの工夫により克服できるだろう。

②かつおについて語り合う夕べ

「かつおについて語り合う夕べ」(以下、夕べと略す)は、任意の参加であるが、約9割の参加者から好意的な回答が得られ、満足度が非常に高い。その理由として、「受検者はもちろん、地元の水産関係者、市長や副市長、組合長、講師の先生方、カツオ・鰹節に興味や関心のある人たちなど様々な異業種の方々と交流ができた」、「語らいのなかで、カツオ愛を大いに感じ取った」が最も数多くあげられ、カツオ・鰹節を通じた交流促進は完遂できた。さらに、「宝石のように光り輝いていた、ぶえん鰹の良さを実感した」、「カツオづくし料理は豊富なレパートリーで美味しかった」、「カツオ料理のレシピや調理法もきちんと知れた」などの回答も多く、さらに、カツオ料理の提供にも満足度が高かった。また、サプライズ企画である鰹節削り競争は、余興として盛り上がり、カツオや鰹節など豪華な賞品が提供されたことも評価されたのである。おまけに、「翌

日の座学と試験に差し支えないように、焼酎の飲みすぎに注意した」、「試験前日のために、参加を悩んだが、参加して良かった」という回答まであり、この夕べを通して、枕崎という地域の人たちの温かさ、おもてなしを実感する受検者は多いようだ。ただ、本検定の回を重ねるごとに、女性の参加者も増えつつあるものの、参加率(参加者/受検者)は不安定な状況にあり、丁寧な周知活動が求められる。(図7、写真11～13参照)

この夕べの開催は、視察・実習と同様に、会場設営、当日の司会進行、サプライズ企画など、枕崎市漁業協同組合、枕崎水産加工業協同組合、枕崎市役所、枕崎市観光協会など関係者の多大な支援と協力があり、円滑に運営されている。

「この夕べを最終日にもしてほしい」という回答がある一方で、細かなことであるが、会場の席配置(途中での席買え)や音響の改善(マイクの接触・適度の音量)などの余地もみられた。この夕べは冒頭に記したように、任意参加の形式であることから、受検者の参加は限られ、より参加したいと思える魅力的な内容、周知方法や進行方法などで更に参加しやすい体制などを検討する必要があるだろう。

③授業・座学

座学で行われた授業に対する満足度も、「良い」、「大変良い」という肯定的な回答が毎回、7割強と

図7 「かつおについて語り合う夕べ」の満足度
(単位：%)

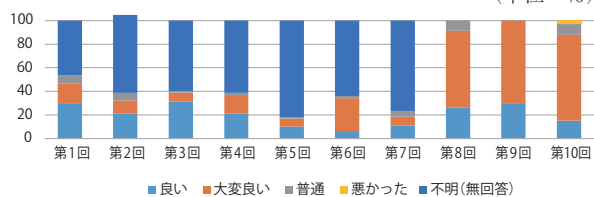


写真12 ぶえん鰹の刺身：第10回検定
(2023年11月、撮影：若林良和)



写真11 かつおについて語り合う夕べ：第10回検定
(2023年11月、撮影：佐藤弘大)



写真13 鰹節削り競争：第6回検定
(2016年11月、撮影：若林良和)

高い。その理由は「テキストの要点、出題のポイントが簡潔に押さえられて、わかりやすかった」、「テキスト自習より、授業の視聴のほうが理解しやすかった」、「限られた時間のなかで、内容的に精一杯のボリュームが確保され、広く深く、みっちり学べた」、「先生方がそれぞれ工夫をして説明してくれて、充実していた」、「各講師の先生方のカツオに対する強い熱意、素晴らしい思いが伝わってきた」、「様々な角度から、カツオ・鯉節に対する考えが述べられて興味深かった」、「話の内容が面白く、親しみやすかった」、「先生方はトークが上手く、飽きずに頭に入りやすかった」などの回答から裏付けられる。さらに、「オムニバス形式で、贅沢な授業だった」、「体系的に学ぶことができた」という高い評価もあった。(図8、写真14～15参照)

しかし、一方で、「情報量の多いなか、1コマの

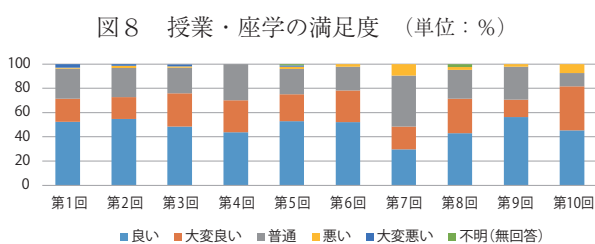


写真14 授業・座学①: 第1回検定
(2011年10月、撮影: 南田敏明)



写真15 授業・座学②: 第6回検定
(2016年11月、撮影: 若林良和)

時間が短く、ついていけない」、「話すスピードが早すぎて、わかりにくい」という時間の短さも毎回、指摘された。また、「講義内容がテキストに沿っていない授業もあった」、「それぞれの授業に、わかりやすさ、聞きやすさの差があった」という、講義の内容や進め方の改善を求める意見もあった。講義の内容と方法について、規格・統一化と独自性のバランスがポイントになる。他方、「質疑応答の機会も必要である」、「テキスト内容にないスライド資料は配布してほしい」という提案や、「パワーポイントが見えにくい」、「講師の声が聞こえにくい」などの回答もあった。したがって、時間の配分、講義の進め方やサポート体制、講義実施時の映像・音響整備は改善の余地があるとみられる。それらの具体的な対策として、パワーポイントのデータを追加資料集(テキストのサポート教材)として小冊子にまとめ、事前配布を徹底することで、受検者への配付、スムーズな進行につながるだろう。幅広い世代の受検者を対象とすることや、受検者のキャリアなどにより習熟度や理解力に違いがあることにも配慮する必要がある。そして、講義内容に関して一定の規格・統一化を進め、受検者にとって理解しやすい講義の内容と方法、準備が求められよう。また、テキストのデジタル化、講義内容の動画配信化、DVDのソフト化など、本検定における講義の内容と方法についてDX化を図る時期に来ているかもしれない。

④ 講習内容に関する今後の方向性

以上のことから、視察・実習、かつおについて語り合う夕べ、授業・座学で構成される本検定は、一定の改善が必要であるものの、満足度も高く、質の高い内容と適確な方法になっていると判断できる。

その他に言及すべきこととして、「全体的としてみると、受検者同士のコミュニケーションが図れており、検定を契機とした交流には価値がある」、「担当講師、スタッフや関係者の配慮や気配りにより快適な検定であった」などの回答から、本検定全体に対して満足度が高いことがうかがえる。また、「産学官の有意義な連携を実感しました」、「事務局・スタッフの運営、検定委員会や担当講師の皆さんの企画に対する熱意を肌で感じました」という回答により、企画・運営体制への評価も高かった。

他方、本検定のより良い発展を期待して、「今回の検定の更なる上のランクに当たる検定があっても良いのではないか。それができたら、再度、受検したい」、「上級のマイスターを設定して、高度な実技があっても良い」、「カツオの生態把握のためにカツオの泳いでいるところの見学(映像シーン)、現場の苦労を少しでも理解してもらうためにカツオ一本

釣り操業風景の映像シーンを試写しては、どうか、「第1日と第2日の時間と内容の配分を再考したほうが良い」、「試験のための視察・実習、試験のための授業・座学の印象もあり、テキスト学習の徹底を事前に周知徹底し、視察・実習などのフィールドワークの充実を期待したい」との提案もあった。そのほかに、「受検者の希望を可能な限り実現しようとするスタッフや関係者の言動に感謝する」という回答が担当講師からもあったことを付記しておきたい。

今後、細部にわたる丁寧な精査をもとに、受検者の立場に立った改善や調整を重ねていくべきである。受検者に対してトータルに改善した検定を再設することは、持続的で効果的な本検定実施につながれると判断する。

2) 検定試験

検定試験の評価については、試験時間の満足度、試験問題の難易度から検討しておく。

①試験時間

試験時間（90分）は、現状を肯定する意見が毎回、約6～7割で推移していることから、妥当だと思われる。ただ、「長すぎる」という回答も3～4割程度あり、試験内容の難易度を考慮する必要があるかもしれない。（図9参照）

また、試験時間内の退席（試験開始の45分経過後に、退室を可とする）、試験実施前における復習・内容確認時間（30～60分程度）の確保などには検討の余地があるようだ。なお、試験問題の持ち帰りを禁止しているが、その解禁を希望する受検者もいた。（写真16参照）

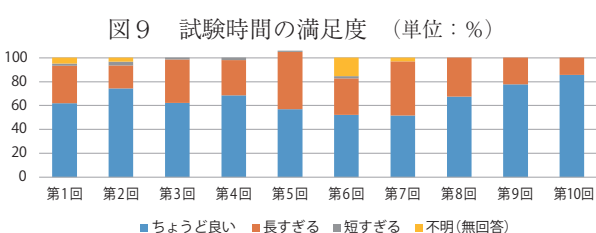
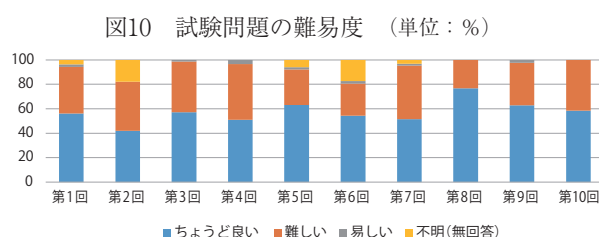


写真16 検定試験の実施：第7回検定
(2017年11月、撮影：板敷浩美)

②試験問題

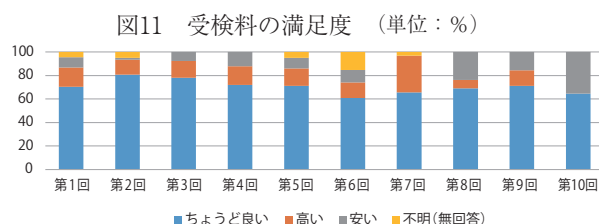
試験問題の難易度については、毎回、大きく変動している。具体的には、「ちょうど良い」の意見は4～6割で、「難しい」が3～5割程度である。「問題が専門すぎる」、「自分の生活に関係するところは勉強になって今後に役立つだろうが、自分に関係しないところは直ぐに忘れてしまいそうだ」という回答もあり、一定の考慮が必要のようである。（図10参照）



3) 受検料

受検料（3,000円）の価格は、毎回、「安い」や「ちょうど良い」の回答が8割前後に達し、適正なもの判断できる。「この検定料で、これだけ濃い充実した2日間を過ごせて、とても良かった」、「枕崎という地域の意気込みを感じ、多くの費用が投入されているのではないと思いますし、また、参加したいです」という極めてポジティブな意見があった。

受検料の妥当性は、前述してきたように、検定の内容や方法に対する満足度が高い上に、地域ぐるみのホスピタリティを伴った対応が起因すると想定できる。したがって、引き続き、現行の価格を維持するのが望ましいだろう。（図11参照）



4) 公式テキスト

公式テキスト『カツオ学入門』の内容や構成に対する評価としては、「大変良い」、「良い」という肯定的な意見が7割弱に達し、その満足度が高いのである。その理由としては、自由記述回答からみると、「この1冊で、生態から流通、文化までの広範囲にわたり専門的に学ぶことができた」、「カツオのあらゆる分野のことが詳しく書かれ、大変、興味深い内容である」、「視察・実習と関連づけて学べて良い」という、テキスト内容の深さが起因している。

そして、『『ぎょしょく』という言葉を知ったが、出汁などの食育講座で活用できる』『『ぎょしょく』のフレームでカツオを説明するのは納得できた』など、「ぎょしょく教育」や魚食普及といった学術的な検討による効果が明白に示されている。さらに、「枕崎だけでなく、他県の事情まで書かれていて、日本全体のことが理解できた」、「世界の状況まで盛り込まれ、幅広い見方ができた」というトータルな視点による記述が歓迎された。また、「カツオにだけスポットを当てて解説するのはありそうではない本だ」、「ここまでの的を絞った本は珍しく、リアリティが良い」という評価はこのテキスト制作の意図に通底するようなポジティブな意見であった。そのほか、「コラムがおもしろく、読みやすかった」、「随所に写真や図が入っていて、良かった」、「模擬試験問題が掲載されており、試験をイメージしやすく役立った」などの回答が多くみられた。いずれにせよ、「わかりやすく、まとめられていた」、「内容を理解しやすかった」、「効率よくまとめられていた」などの読みやすさ、わかりやすさは好評であり、カツオに対する総合的な把握と理解というテキストの趣旨が活かされていた。それで、「カツオに関する質、量ともに、枕崎カツオマイスターにちょうど良い」テキストだという評価も多くあった。(図12参照)

他方、否定的な回答は「印刷ミス、訂正箇所が多い」という誤植に対する不満が多かった。これについては、正誤表の配付などで是正が試みられている。そのほか、「もっと、写真や図表、グラフをふんだんに入れてほしい」、「図や写真が見にくい」、「写真はカラーにすべき。特に、本枯節のルビー色」など写真の改善を求める意見が多くみられた。そのほか、「用語解説や索引があると、便利だった」、「専門用語などに読み仮名をもっと付けるべき」、「模擬問題に解説を付けてほしい」などがあげられる。さらに、内容的に「観光ツアーや料理法などエンターテインメント的な内容を追加してほしい」、体裁として「漫画やコミック風にして、もっと取っつきやすくしてはどうか」などの提案もあった。

以上のことから、公式テキストは「素晴らしい内

容の本なので、もっと広めて、毎年100人の受検者になることを期待したい」という回答もあるように、全体として高評価であった。したがって、誤植などの是正、データの更新、新説の追加などを前提にして、現行のテキストを全面的に改訂する必要があるだろう。

(7) 友人・知人への推奨意欲

本検定を友人・知人に勧めたいかという回答では、「勧めたい」が毎回、5～7割と高く推移している。その理由としては、「多くの人たちに、カツオ・鰹節をより好きになってほしいから」、「枕崎のカツオ・鰹節の奥深さを、広く知ってほしいから」、「枕崎のカツオ・鰹節の魅力を普及したいから」、「枕崎市民でも知らないことに気付けたことが多くあり、もっと知る人が増えるべきだから」、「食材としてのカツオ・鰹節のメリットを子供たちに伝えたいから」という積極的な普及啓発に向けた意見があげられる。それから、「県外の人たちに自慢ができる検定だから」、「鹿児島県人として、素晴らしい枕崎、そして、カツオ・鰹節を知ってもらいたいから」、「枕崎カツオマイスターの使命として広めたいから」、「鹿児島の水産業において、枕崎のカツオ漁業・鰹節製造業は、はずせないから」という地域特性を念頭に置いた思いがあった。さらに、「鰹節メーカーなど仕事上の必要な知識がしっかり学べるから」、「(会社(鰹節関係)の職員研修に役立つと思うから)」、「同業者(水産関係)には参考になるから」、「将来の職業選択に有利となるかもしれないから」、「カツオ・鰹節に関する人脈・ネットワークが広がるから」といった実利的な理由も多くみられる。(図13参照)

ただ、第2回以降、「わからない」という回答の割合が年々、増加傾向にあり、第5回では、「勧めたい」と「わからない」の回答がほぼ拮抗した状況になった。ただ、具体的な理由に関する記述のないことが多く、「合格しても、特典が十分でないから」、「枕崎まで遠く、そのメリットがないように思うから」、「(友人・知人には、)興味や好み異なるから」、「専門的な学びには良いが、自分が勧めても相手に伝わらなかわからないから」、「就職に役立つか、わからないか

図12 公式テキストの満足度 (単位: %)

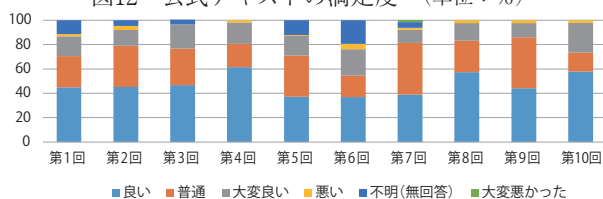
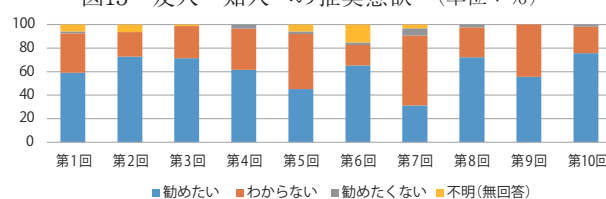


図13 友人・知人への推奨意欲 (単位: %)



ら」といったネガティブな意見も散見している。

したがって、友人・知人に勧めたくなるような、より魅力的な検定にしていくために、更なる改善や不断の創意工夫は必要だろう。

(8) 今後の生活への活用方法

今後の生活に本検定をどのように活用したいかを自由記述の回答には、多様な意見や考えがみられた。ここでは、過去 10 回の検定において、代表的な活用や特徴的な活用を紹介しながら検討していく。

まず、多くみられる代表的で共通した活用は、以下の 3 つの意見に大別できる。

第 1 に、「仕事に活かしたい」、「これから始める事業に活かしたい」という回答である。これはカツオ・鰹節に関する製造業、販売業や飲食業などに従事する受検者が、それらの販路拡大、消費拡大、さらには、スキルアップにつなげるといった仕事や起業に役立てようとするものであった。

第 2 に、「かつおだしの取り方、カツオのさばき方を家庭などで実践したい」、「普段の生活にカツオや鰹節を取り入れて、食生活を豊かにしたい」、「魚の食育を推進しながら、食生活の改善に努めたい」という回答である。カツオ・鰹節を自分の食生活に活かして自己啓発を進めようとするものであった。

第 3 に、「カツオの目利き、鰹節の選び方を体得できたので、広めたい」、「枕崎のカツオ・鰹節の良さを身近なこととして伝えたい」、「県内外で、鹿児島県の魚・枕崎市の魚であるカツオ・鰹節、枕崎の PR に利用したい」、「友人・知人が来た際に、枕崎のカツオ・鰹節を紹介したい」、「料理講習会や食育研修、Facebook など SNS を利用して広げたい」、「カツオ・鰹節のことを幅広く学ぶことができたので、それらの素晴らしさを適確にアピールしたい」という回答である。これは、県内外でカツオ・鰹節、そして、枕崎という地域の価値を積極的に PR することであった。いずれも、授業・座学で得た知識を、視察・実習で得た技術を、それぞれ実生活で実践しながら、カツオ・鰹節に関する良さや価値を普及しようとする建設的な志向が顕著である。

それから、特徴的で個性的な活用としては、「今、使っている名刺にマイスターを記載して積極的に PR したい」、「これからの履歴書（資格・特技の欄、趣味の欄）にマイスターを記載したい」、「顧客へのカツオ・鰹節に関する説明で、良いネタとなるので工夫して利用したい」、「カツオについて知っているようで、知らないことが多いこと、さらに、ためになることをいろいろと PR したい」、「合格したら、カツオが大好きだということを様々なところで、しっかり発信して

いきたい」、「周りの人たちに、カツオのことなら私に聞けと言われる人間になりたいです」、「本検定を糧にして、他の生物についても見識を深めたい」など、多種多様な考えがあった。また、高校生や大学生などの受検者は「大学院の研究に役立てたい」、「卒業研究でカツオ・鰹節をテーマにしたい」、「進学や就職のアピール材料としたい」という回答が多くみられた。

以上のことから、本検定は、代表的な活用や特徴的な活用から見ると、当初より意図した目的や趣旨と合致する部分が多く、所期の目標が達成されていることを裏付けられた。そして、本検定は、カツオに関する「ぎょしょく教育」の実践活動、カツオ食の普及啓発に関する動機付けはもちろん、それらの促進につながったものと想定できよう。

(9) 改善点や希望内容、推進事項

過去 10 回の本検定において、改善すべきことや希望することなど、主たる意見を中心に整理し検討しておく。

第 1 に、検定の内容的なものとして、「実際に漁業者からの声を聞いてみたい」、「カツオ漁船（一本釣り漁船や旋網漁船）に体験乗船したい」、「枕崎港にある冷凍冷蔵庫など水産関連施設を見学したい」など、より現場に即した体験をもとにした実際的な内容が求められる。体験をより重視するならば、- 50℃冷凍庫への入庫、カツオの薫焼きの体験などの追加メニューを検討する余地はあるだろう。さらには、「枕崎市で取り組んでいるカツオに対する取組、たとえば、食育活動等の紹介があっても良い」、「定期的に、体験会や勉強会などがあると良い」という提案からも、カツオ・鰹節と食をめぐる内容を明確に提示する必要がある。

第 2 に、「マイスター取得による特典を充実してほしい」、「資格を持つことによるメリットをもっと高めしてほしい」があげられ、受検者の安定的な確保に向けて、本検定の魅力アップはさらに求められる。とりわけ、マイスターに対する特典の明確な設定と周知は不可欠であろう。また、合格後のフォローアップにも力を入れていくべきである。たとえば、マイスター相互の情報や意見の交換の場を設定したり、枕崎でのイベントなどでの活躍の場を創出したりするなど、可能な範囲で応援やサポートは重要になってくる。そのほか、フランス招待の企画はインパクトがあって効果的だったようであり、その継続を望む意見が多かった。⁸⁾

第 3 に、学割に加えて、他県からの受検による割引など、受検料に関する各種割引の設定がある。これまでも触れたように、本検定は、枕崎という地域そのものの PR も担っていることから、県外受検者の増加

を念頭に置いた新たな仕組みも必要であろう。さらに、副次的に、地域特産品の販売コーナー設置による経済効果が考えられる。たとえば、県内外の受検者を主な対象に、お魚センターやかつお公社、地場産業センターなどで、カツオ包丁や鰹節削り器、祝事用の雌雄の揃った鰹節、各種のカツオ製品などを購入できる機会を設けることがあげられる。

第4に、検定内容の難易度、受検者のキャリアによる習熟度に注目すれば、初級～中級～上級といった検定のグレード分け、あるいは、水産や食に関わる他の検定との連携が想定できる。本検定をベースにして、学習の意欲と効果が継続的に高められ、それらの相乗効果は期待できよう。上級のハイレベルな検定は高度な専門的な内容とし、技術や営業、研究などの専門職関係者でより高い実利性を具有するものになる。他方、初級のプリミティブなレベルの検定は、基礎的な知見を理解して、楽しく学べるような教養的な内容とし、幅広く一般向けに汎用性や趣味・娯楽性を有するものが構想できるだろう。⁹⁾ また、観光型のライトな検定からスペシャリスト型のコアな検定まで多様で幅広いタイプの検定が想定される。本検定の適確な性格付けが極めて重要であり、それに連動しながら、その特性に見合った周知活動は不可欠である。少なくとも、講義と実習で高度な内容を備えた上級レベルのマイスターの設定は、受検合格者のモチベーションが維持され、本検討の質的保証につながる。他方、「もし不合格になったら、再度、挑戦したい」という回答も見受けられ、リピーターの獲得は、更なる交流人口の増加につながる可能性がある。したがって、今後、本検定は、よりきめ細やかな対応と配慮も必要であろう。

第5に、「マイスター相互が交流し活躍する機会の提供がほしい」、「今後、勉強会やイベント、体験会などを設けてほしい」、「HP等ネットを利用して各自のスキルアップにつながる情報提供をしてほしい」、「メルマガ等での情報発信、他市のカツオ関係者との交流などの事後の交流を企画してほしい」というリクエストが多々あった。こうしたマイスター相互の交流と連携の機会とその場が設定でき機能し始めれば、本検定、そして、マイスターの価値はさらに高まるとともに、枕崎市やカツオ産業にも恩恵が生まれるだろう。

あと、細かいことだが、時間の配分に関する検討事項が2点ある。まず、第1日の開始時間と第2日の終了時間は、会場設営などの都合もあるが、遠方の県外受検者を考慮して、交通アクセスを念頭に置いたスケジュールにする必要があるだろう。次に、2日間の昼食（1日目は地元グルメである「船人めし」の提供、2日目は自由で任意の対応）についても看取すべきである。「昼食時間が短い」、「2日目の昼食では、地



写真17 第1日目の昼食で提供された「船人めし」：
第6回検定（2016年11月、撮影：若林良和）

元の飲食店を案内するならば、余裕ある時間がほしい」といった回答を考慮すれば、昼食の時間確保や取り方を整備していくべきであろう。（写真17参照）

以上のことから、本検定のスキームそのものを見直して再構築することは、当初の目標を完遂でき、水産振興や漁村地域活性化につながるだろう。本検定は、カツオの学びを通して様々な立場や分野の人たちが向き合い、いろんな情報や意見を交換しながら、カツオ・鰹節の価値を共有し、可能などころから大同団結して取り組んでいく機会やステップといえる。今後、新たな受検者の確保に向けて、視察・実習、授業・座学の内容と進め方をはじめ、他の検定との差異化を念頭に置きながら再検討していくことは肝要である。

（10）具体的な検定改善策の提案

本検定は、「ぎょしょく教育」のコンセプトやメソッドを準用して、地域理解教育の展開や魚食普及の推進、そして、枕崎という地域のPRの役割も担っている。そのためにも、受検者の量的側面と質的側面に関する拡充が不可欠であることから、本検定には、①参加しやすくする環境づくりの構築、そして、②参加したくなる内容への更新が必要である。

1) 参加しやすい環境づくりの構築

生まれ育った地域の様々な水産物に対して理解を深めることは、地域に対する愛着や誇りの醸成には極めて重要である。したがって、受検者に可能な限り、参加しやすい環境づくりが構築されるべきであろう。

まず、県内の受検者確保は、地域ぐるみで教育の場において小中高校の課外活動などの一環に組み込んだり、将来の選択肢が比較的広い大学生を中心に

受検を呼びかけたりしていくべきである。学生割引は現在、受検料の半額となっているが、今後、団体割引など様々な割引制度を検討してもよいかもしれない。

他方、県外からの受検者確保では、枕崎市までの交通費用やアクセスが課題である。本検定の趣旨を考慮すれば、他地域での本検定実施は好ましくないことから、鹿児島中央駅や鹿児島空港から枕崎市までの送迎バスなどの輸送も検討していく必要があるだろう。また、全国で水産関係分野を学んでいる生徒や学生たちに対しても、たとえば、修学旅行やゼミ合宿などの延長線上として受検するよう積極的なPRを行うべきである。

2) 参加したくなる内容への更新

まず、検定内容については、データ更新にとどまらず、新たな知見を盛り込んだり、難易度に応じたグレードを設定したりして、できるだけ参加しやすくする手立てが肝要である。そして、受検者の参加意欲を高めて、そのリピーターの増加が見込める創意工夫はさらに検討していくべきであろう。

次に、全問正解者の特賞としてフランス招待が第6回～第9回の検定で設定された。これは、枕崎水産加工業協同組合と株式会社枕崎フランス鰹節の支援により実施されたものである。¹⁰⁾ この特賞は、受検者のモチベーションアップ、受検者の確保などの観点からすれば、一定の効果があった。したがって、マイスター取得後、特典やメリットの付与は総合的に検討していく余地があるだろう。

さらに、女性の受検者が限られていることから、女性に歓迎されるような内容を導入し、クチコミやSNSによる波及効果も期待していくべきである。

以上のことから、本検定は、筆記試験で到達度を測るだけでなく、授業・座学や視察・実習などを盛り込んだ体験型の検定である。その特性として、1泊2日で、人間の五感をフルに使って様々な体験を通じて、カツオや鰹節、さらに、枕崎という地域について理解を深められることから、本検定は幅広く効果的なものとなり、水産振興や漁村地域活性化につながっていく可能性を持つものと期待できよう。

5. おわりに

以上の受検生アンケート結果の分析から、本検定のリニューアルに当たったの基本コンセプト、つまり、リニューアル企画・実施に求められる5つのポリシーは以下の通りに設定できる。¹¹⁾

第1に、本検定の対象者については、性別を超えて全世代対応型の検定を志向する。老若男女を問わないこと、つまり、ジェンダーフリーで全世代的に、カツ

オ・鰹節に対する親和性や好奇心を保持しながら、それらの魅力や良さをさらに惹起させたり、再確認させたりして、それらの優れた価値を伝導できるように配慮していく。

第2に、本検定の内容としては、フィールド体験型の検定を前提とする。これまで以上に体験の要素を重視して、カツオ・鰹節に関する知識を基盤にしつつ、視察・実習など体験を核に置いたカリキュラムが展開されていくべきであろう。とりわけ、今後の本検定は人間の五官を通した五感をもとに、カツオ・鰹節の良さを体験し実感することを原則とする。つまり、三現主義の立場から、現場（カツオの生産と加工のフィールド・空間）で現物（カツオや鰹節の本物）を体感すること、すなわち、本場の本物である、枕崎のカツオ・鰹節を体験することで、現実（カツオ産業文化のリアリティ）を把握し理解することを、本検定のねらいとしていく。

第3に、本検定の内容と方法に関しては、より一層、地域密着型の検定とする。この間の実績をもとに、本検定は、これまで以上に地域コミュニティとの伴走を前提に、地域の特性や産業の特質を踏まえた内容と方法で推進する。そして、リスニングやリカレント教育に連動する内容も積極的に取り入れていく。

第4に、本検定の方法からは、地域協働型の検定とする。これまでの地域ぐるみの連携のとれた実施体制をさらに進展させ、地域の産官学民による連携と協働の強化をもとに、カツオ・鰹節の新たな価値創造につながる取組へと昇華させていく。

第5に、本検定の姿勢として、コミュニティ共進型の検定へとする。本検定の対象～内容～方法に至るプロセスで通底するトータルな姿勢、あるいは、協働していくための原則となるマインドは、カツオ・鰹節の価値共創に向けて、地域コミュニティの総意による「共進」の精神が不可欠だと考えられる。

補記

本稿を終えるにあたり、本検定を企画し実施責任者である筆者（若林）として、達成感と至福感を得たエピソードを紹介しておきたい。それは2025年10月初旬に届いた朗報である。2023年11月に実施した第10回検定の「かつおについて語り合う夕べ」で、枕崎カツオマイスターとなった後の抱負や夢を切々と語る男性がいた。彼は、紆余曲折を経て、本場の本物である枕崎の本枯節を使った、こだわりの蕎麦屋開業という宿願の夢を実現したのである。筆者（若林）は、これも、また、本検定の目標や意図を具現化したシンボリックな出来事の一つとして感銘を受けた。

これまでも、渋谷で鰹節の御飯屋さんを開業して多くのファンを獲得している第4回の女性マイスター、さらに、全国各地の子供たちに鰹節教室を開いて出汁の重要性を説いている第9回の女性マイスターなど、本検定の趣旨を見事に体現している枕崎カツオマイスターの活躍は、私が知り得ている情報だけでも枚挙にいとまがない。多様な分野で多種の立場にいる枕崎カツオマイスターは、カツオ・鰹節の魅力を伝える伝道師となつて、幅広い社会生活のシーンで、地道に手堅く普及啓蒙されている。こうした状況に感動し、カツオ・鰹節の価値が共創されてきたことに感謝し、今後も多面的な展開があることを大いに期待したいと考えている。

謝辞

今回の取りまとめにあたっては、枕崎市のカツオ産業をはじめとして多方面のステークホルダーの皆さんからご協力とご支援を賜った。改めて厚く御礼を申し上げたい。とりわけ、前田祝成・枕崎市長、市田恵八朗・枕崎市漁業協同組合長、的場信也・枕崎水産加工業協同組合長をはじめとする枕崎カツオマイスター検定推進協議会の皆さん、枕崎カツオマイスター検定委員会の委員の皆さん、そして、枕崎市役所や枕崎市漁業協同組合、枕崎水産加工業協同組合の職員の皆さんには、実務的に多大なご尽力をいただき、深謝いたします。

第11回以降の枕崎カツオマイスター検定も、同協議会、同検定委員会の意向により継続的に実施することになっている。枕崎市内外のカツオ産業関連組織・団体、さらには、枕崎市民の皆さんには、引き続き、ご支援とご鞭撻のほどをお願いしたい。筆者らは今後も、枕崎カツオマイスター検定のより良い実施に向けて取り組んでいきたいと考えている。

注

- 1) 本稿は、若林の指示にもとづいて佐藤と濱村が受検者アンケートの集計結果(NPO法人エコ・リンク・アソシエーション(2011～2017)、枕崎カツオマイスター検定推進協議会(2018～2019, 2023))を整理し、それをもとに、若林が枕崎カツオマイスター検定推進協議会の意向を踏まえながら分析し記述したものである。
- 2) 本稿では、筆者(若林)が指導した、枕崎カツオマイスター検定に関する論文や授業レポートも補助的に活用した。具体的には、木村(2016)、武田(2016)の愛媛大学農学部卒業論文、谷本(2016)の農学部授業「フィールドワーク論」レポートである。ちなみに、これら3人の学生が本検定を受検しており、彼女らを含めた愛媛大学出身学生の合格者(枕崎カツオマイ

スター)は合計6人に及んでいる。それらのうち、3人の卒業生は愛媛県内の鰹節・削り節会社をはじめ水産関係や食品製造関係の企業に就職した。

- 3) 鹿児島県枕崎市の地域概要、さらに、カツオ産業文化に関して、これまでに筆者(若林)がとりまとめた論考に、若林(2020)、若林・板敷(2020)があり、それらが参考になる。
- 4) 公式テキストである『カツオ学入門』は筆者(若林)を編集代表として、7つの「ぎょしょく」、さらに、フードシステムの観点から、カツオ・鰹節に関する種類と生理・構造、資源と生態、成分と機能、漁撈と加工利用、経済と流通・消費、歴史と文化、地域活性化と産業振興などの内容を、文理融合的な整理方法によりとりまとめたものである。2011年刊行の本書は170ページ、10章構成で、一般に市販されていた。
- 5) 日本カツオ学会は、日本各地における地域の産官学民の協働のもとに、カツオ漁獲の不安定さ、さらには、カツオ資源の枯渇という危機感が背景から、2011(平成23)年に創設された。学会の目的は、地域ぐるみで「カツオとの上手な付き合い方」を探り、①カツオ資源の持続的な利用に向けた取組・仕組みづくり、②カツオ資源の利用に関わる価値創造の仕掛けと発信、などを検討することにある。なお、初代会長は筆者(若林)であった。詳細は、日本カツオ学会(2021)を参照のこと。
- 6) 「ぎょしょく教育」の実体概念と実践内容に関しては、若林(2008)、若林・阿部(2018)、若林(2021)を参照のこと。
- 7) アンケートの回答で一部に未記入などがあるために、合計の一致しない箇所があることを予め、了承いただきたい。
- 8) フランス招待は枕崎水産加工業協同組合から提案されたものである。組合員有志で組織された株式会社枕崎フランス鰹節がフランスのブルターニュ地方にあるコンカルノーに鰹節製造工場を新設したことによる。その工場視察招待も兼ねたフランス渡航費を支弁するものであった。なお、全問正解者ではなかったために、この企画は実行されなかった。
- 9) これまでの検定における現実なメリットは業種や職種に限られることから、リニューアル企画の検定は、マイスターという称号ではなく、広く「学び」を意味する称号とする案もあるだろう。
- 10) 第10回の特賞は、フランス招待の代替として、旅行券10万円となった。
- 11) 過去10回にわたる本検定の軌跡や実施経過の詳細については、別稿を準備している。

文献

NPO法人エコ・リンク・アソシエーション(2011～

- 2017) 第1～7回枕崎カツオマイスター検定アンケート集計結果および分析、枕崎カツオマイスター検定推進協議会
- 木村早希 (2016) 「ぎょしょく教育」による地域理解教育の可能性 (農学部卒業論文)
- 武田莉奈 (2016) 魚食普及と消費者教育のあり方に関する考察 (農学部卒業論文)
- 谷本和香奈 (2016) 枕崎カツオマイスター検定の現状と課題 (農学部フィールドワーク論レポート)
- 日本カツオ学会 (2021) カツオとの「上手な付き合い方」を目指して-日本カツオ学会10年史-
- 枕崎カツオマイスター検定推進協議会 (2018～2019) 第8～9回枕崎カツオマイスター検定アンケート集計結果、枕崎カツオマイスター検定推進協議会
- 枕崎カツオマイスター検定推進協議会 (2023) 第10回枕崎カツオマイスター検定アンケート集計結果、枕崎カツオマイスター検定推進協議会)
- 若林 (2008) ぎょしょく教育 - 愛媛県愛南町発水産版食育の実践と提言、筑波書房、162 P
- 若林・阿部 (2018) 「ぎょしょく教育」活動の軌跡と新展開 - 水産分野における就学前食育の検討 -、水産振興 52 (12) 第 612 号、113 P
- 若林良和 (2020) 鹿児島県枕崎市におけるカツオの産業と文化〈1〉-「ぎょしょく」をもとにした地域モノグラフ (3)-、愛媛大学社会共創学部紀要 4 (2)、pp.7-26.
- 若林良和・板敷浩実 (2020) 鹿児島県枕崎市におけるカツオの産業と文化〈2〉-「ぎょしょく」をもとにした地域モノグラフ (3)、農学部紀要 65、pp.7-18
- 若林 (2021) 食育共創論 - 地域密着と世代重視の実践から食の未来を拓く -、筑波書房、261 P